

博士論文要旨

本会の鄧 敏君会員が 2009 年 3 月に以下の博士論文を名古屋大学に提出し、博士号を授与されました。以下にその概要を紹介します。

論文題目：日本語・中国語間の翻訳テキストの観察に基づく翻訳行為の特徴の分析
—観光案内の双方向パラレルコーパスを用いた文の構成に関する研究—

提出機関：名古屋大学国際開発研究科国際コミュニケーション専攻

提出者：鄧 敏君（台湾輔仁大学翻訳学研究所）

指導教官：藤村逸子教授、滝沢直宏教授、丸尾誠准教授

提出年月：2009 年 3 月

和文要旨

本論文は、日本語と中国語間の翻訳行為と翻訳テキストを研究対象にし、一貫したテキストを形成するために文が構成される中で、翻訳者がとる言語行為にはどのような特徴が存在するのかを解明することを目的としている。資料としては、レジスターを観光案内に限定し、日本語と中国語のテキスト、およびその中国語訳と日本語訳の 4 種類のテキストからなる小規模双方向パラレルコーパスを構築して用いた。分析対象としたのは、文の長さ、コンピュータ文を構成する要素の形式、およびテキストの形成において重要な働きをする「出発点」および「は」で表示される要素であり、これらの要素の出現と特徴を量的におよび質的に分析した。翻訳文と非翻訳文を独立したテキストとして比較することと、原文から翻訳文への変化を観察することという 2 つの方法をとったことによって、翻訳行為に関わる要因を精緻に考察できた。すなわち、翻訳テキストに現れる特徴のうち、起点言語と目標言語の言語的な相違に基づくものと、翻訳行為それ自体に基づくものを分離して、分析した。また、コーパスにおいて観察された特徴に影響する要因を掘り下げるために、外部の大規模コーパスによる検証および、インフォーマント調査の手法も取り入れた。

本論文は 8 章から構成されている。第 1 章「序論」では、研究目的、先行研究、本論文の構成を述べた。第 2 章では、本研究におけるコーパスの構築、分析の枠組みについて述べた。具体的な分析は第 3 章から第 7 章である。第 3 章と第 4 章では、4 つのサブコーパスに現れる文の長さやコンピュータ文の構成要素の形式に関して検討した。第 5 章から 7 章にかけては、一貫したテキストの展開において重要な働きをされると考えられる「出発点」および「は」で表示される要素を取り上げ、考察を進めた。第 8 章「結論」では、本研究で明らかになった翻訳行為と翻訳テキストの特徴をまとめ、方法論へのフィードバック、日本語と中国語間の翻訳の実践への示唆を提示し、本研

究のコーパスの限界、および、これからの課題を述べた。

3章から7章の分析結果は以下のようにまとめられる。

第3章では、4つのサブコーパスにおける、文の長さやそれに影響を与える要因に関して考察した。本研究の資料によると、中国語の非翻訳文は日本語の非翻訳文より、句点の使用が少なく、極端に長い文が多い。翻訳文は、日本語も中国語も日本語非翻訳文と近似して、長い文は少ない。原文と翻訳文の対応関係をみると、中国語翻訳文では日本語原文の文長のまま翻訳され、日本語翻訳文では中国語原文の長い文が短く切られている。その理由としては、第一に、翻訳者は文長に関して、可能な限り原文のまま翻訳する傾向があること、第二に、適切でない場合には、目標言語の傾向、および簡潔に文を処理する傾向に従うことが考えられる。中国語では文の長さに関する使用習慣の制限が緩いのでそのまま翻訳されるため、中国語翻訳文では日本語の原文の長さがそのまま維持される。日本語翻訳文で、長い文の産出が少ないのは、長文の作成には工夫や労力がかかり、そして文を簡潔に処理しようとする翻訳行為それ自体の性質も作用していると考えられる。

第4章では、コンピュータ文を構成する要素の形式的な特徴を4つのサブコーパスにおいて比較検討した。中国語の非翻訳文と、中国語と日本語の翻訳文では、簡素な形式を持つ前項(=主語)が多くみられる。日本語の非翻訳文は、名詞節を前項とするコンピュータ文が多いことを主な原因として、4つのサブコーパスの中で最も隔たった存在となっている。中国語翻訳文では、簡素な前項の形式を好む中国語の使用習慣が制約となり、日本語原文の主語に名詞節が多いにも関わらず、中国語の特徴に従って文が構成されている。一方、日本語翻訳文では中国語原文の簡素な主語の形式を難なく引継ぐので、中国語非翻訳文の特徴を多く取り入れることになっている。

第5章では、日本語と中国語のコンピュータ文、日本語の「なる」構文、中国語の分類・属性動詞構文の「出発点」を構成する語群の特徴を検討した。「出発点」とは、節が表わす出来事や状態に関わる参与要素や状況要素などを表す語群のうちで、先頭に出現する要素のことを言う。中国語においては、文の「出発点」に関する使用習慣の制限が厳しいので、中国語は、翻訳文、非翻訳文ともに、文頭の節において主語が省略される例は少なく、「出発点」の文法役割には共通性が高い。一方、日本語では「出発点」に関する制限が緩いため、その文法役割は共通性が低い。すなわち、日本語では、「は」によって取り立てられる主題が、文を超えて次の文に移っても主題の役割を果たす「ピリオド越え」の現象があるので、日本語非翻訳文では文頭の節において主語の省略が多くみられる。日本語翻訳文は中国語原文の「出発点」の特徴を多く引継ぐ傾向が強いが、日本語の非翻訳文の特徴とも融合し、中間的な傾向を見せている。

第4章と第5章の分析結果をまとめると次の翻訳テキストの特徴が言える。ある言語特徴の選択に関して、2つの言語の間で規範の適用の厳格さに違いが存在すると、翻訳の過程を経て、翻訳テキストは、規範の厳格な方の基準に従ったものになる。翻訳の過程において、原文のある言語形式が目標言語において維持されることが可能で、かつそれが適切である場合には、翻訳文は原文に従う傾向が強い。つまり、起点言語の

ある言語形式の使用が、目標言語において適用できる場合、翻訳文は原文に従う。原文の言語形式を目標言語において維持することが適切でない場合には、翻訳文では原文の言語形式を変化させ、目標言語の言語特徴に従わせる。このようにして、翻訳テキストにおける使用頻度は、両言語ともに、規範の適用の厳格な方の言語の使用頻度に近づく。生起頻度の観点から言うと、規範の適用の厳格な方の言語の原文テキストにおける頻度が、適用の緩い言語の翻訳テキストにおける頻度に干渉することになる。なお、第3章の翻訳文の文長の使用傾向は、第4章と第5章の翻訳文の特徴と似ている。文の長さに関して、日本語では長文の使用の必要性は中国語ほど強くないので、両言語間の違いは、規範の適用の厳格さにあるのではなく、言語特徴の選択の必要性にあると考えられる。また、翻訳の過程において、原文の言語特徴が目標言語において必要であれば、翻訳テキストにおいて維持されやすい。必要性が低く、維持するための労力が必要性につりあわない場合には変化する傾向がある。こうした結果、翻訳テキストの文長は、両言語とも、労力を要しない日本語により近い生起の傾向を示す。

第6章では、日本語の翻訳文と非翻訳文における主題マーカの「は」に表示された要素の特徴に焦点を当てた。非翻訳文に比べて、翻訳文における「は」は、出現頻度が顕著に高く、翻訳文では「主語」は「が」よりも「は」に伴われる場合が多く、「は」要素は「主語」とともに出現する頻度が、他の文法役割の要素とともに出現する頻度よりも高い傾向が観察された。さらに、中国語の原文において対応する節には明示されていない「主語」を「は」要素として翻訳文に添加すること、「は」要素に対応する中国語原文の要素は「主語」である傾向が強いことも観察された。

第7章では、日本語翻訳文において「は」によって表示される要素の多用の理由を明らかにするための一助として、新情報の「は」要素の使用傾向に関するインフォーマント調査を行なった。その結果、「が」と「は」の両方が使用可能と判断される場合には、「は」が好まれて使用されるという「典型化」の特徴が発見された。

第6章と第7章の分析結果をまとめると次のように言える。翻訳行為に「主語」と「は」の強い共起傾向が反映され、その結果、中国語原文の「主語」が日本語の「主語」+「は」に翻訳されることが多く、そして「が」が可能な場合にも、「は」が好まれて選ばれる傾向が強い。このようにして、日本語翻訳文では「は」要素が「主語」に一致するという典型的な使用パターンが多くなり、また、翻訳文における「は」の多用につながっている。

以上の分析結果から、本研究の翻訳テキストは以下のように独自の特徴を持つテキストであることが言える。中国語では、包括的な主題を中心にして思考を展開させる単位は文である。そのため、文の「出発点」はテキストの形成に重要な役割を果たしている。本研究の中国語翻訳文においては、文の「出発点」の条件と主語の形式は中国語非翻訳文の特徴に近似しているが、長い文の使用は少なく、主題を展開させる思考単位も比較的短い。この点において、翻訳文は、中国語的な主題発展とは特徴を異にする。一方、日本語では「は」で表示される主題は文末までだけでなく、いくつかの句点を越えて、次の主題が現れる直前まで主題として係ることが可能である。本

研究の日本語翻訳文では、文の長さは非翻訳文と大きく異ならないが、文頭の節において主語の省略は少なく、その主語に対して主題マーカの「は」が頻繁に使用されるため、一つ一つ独立した主題を有する文が多くなっている。結局、翻訳文は中国語も日本語も、主題の明示が頻繁であり、大きな一つの主題について語るという機能が弱まっている。本研究の調査結果からは、テキストの主題展開に関して、翻訳テキストは、目標言語の言語規範から逸脱しているわけではないが、目標言語の特徴とは異なった面を持っていると言える。

本論文では、日本語・中国語間の翻訳行為と翻訳テキストの特徴の一端を明らかにした他、方法論に関して以下の研究成果を挙げた。第一に、本論文は、記述的翻訳研究、計量的方法論、日本語と中国語の対照言語学の3分野を結ぶ研究手法の可能性を実証した。第二に、本論文は翻訳テキストと翻訳行為の特徴を発見し、提示するという記述的な翻訳研究にとどまらず、中、日両言語の特徴に体系的に深く立ち入る調査方法によって、翻訳者の言語行動を左右する要因を解明するという解釈的、説明的な翻訳研究を実践した。今後の課題としては、他の起点言語と目標言語、他のレジスター、他の言語分析の項目に関して、以上で発見した翻訳行為の傾向および翻訳テキストの特徴の検証をすすめる必要がある。

.....

【著者紹介】 鄧 敏君 (トウ ビンクン Teng, Minchun) 台湾輔仁大学翻訳学研究所 PD。現在、台湾輔仁大学翻訳学研究所の楊承淑先生のもとで研究をしている。コーパスを用いて翻訳テキストの特徴に関する研究に力を注いでいる。

連絡先 : claireteng@hotmail.co.jp